

## 研究ノート

# イタリア社会党と議会（1892年～1900年）

横 山 隆 作

## I ま え が き

本稿は、イタリア労働運動史（1892年～1911年）という基本的研究課題の下に、1892年より1900年に至る19世紀末期のイタリア社会党の活動を、国会（下院）との関係に重点をおいて研究し、年代記的に記述したものである。<sup>1)</sup>

### 注

- 1) 本稿は、以前の拙稿「試論：イタリア資本主義の発達と大衆運動——19世紀末の農民問題を中心に——」三田学会雑誌、第66巻第1号（1973年1月号）における大衆運動の記述を、社会党史という側面から補足する必要が感じられたことと、また、淑徳大学研究紀要、第15号（1981年3月）所載の拙稿「イタリア社会党の結成、1879年～1892年」と、同じく淑徳大学研究紀要、第16号（1982年3月）所載の「20世紀初頭のイタリア労働運動と社会党改良派（1901～1902）」の2編の研究ノートに記述した時期の中間を補填する必要があったこと、この2点にもとづいて作成された。短い期間ではあるが8年間を通して、分りやすく記述しようと考えて、chronologyとしたため、内容において、分析や事件細部の追求が不足する結果となり、まことに遺憾であるが、読者諸兄の御有恕を乞う次第である。

## II 第1次ジョリッティ内閣の時期

イタリア社会党にとって、議会と選挙の問題は、1892年8月の同党結成当初からの重要問題であった。社会党結成（当時の党名はイタリア労働者党 PLI）の3カ月後、1892年11月6日・13日に下院第18議会総選挙が行われることになった。それ以前、1892年9月初旬、党機関紙『ロッタ・ディ・クラッセ』（Lotta di classe）は、常備軍の廃止、法定10時間労働制、児童労働保護などからなる「我々の最小限綱領」を掲載した。これはもちろん党の当面の具体的な活動のプログラムなのであるが、それと同時に、社会党（PLI）の独自候補不在の

選挙区での投票や、第2次投票（決選投票）に際して他党の候補者を選択する場合の、判断の指針になるというものであった。<sup>2)</sup>

1892年10月11日に下院解散の勅令が出て間もなく、イタリア労働者党中央委員会は、次の5項目の「短期的な権利要求の具体的綱領」を含む、国会解散についてのアピールを発表した。その5項目とは、要約すると、1)10時間法定労働日、2)勤労者集団に無期限永小作として信託すべく、未耕地を収用すること、3)鉄道その他の大規模な公共サービスを、その従業員が構成する協同組合に経営を譲るべく、解放すること、4)ブルジョアジー丸もうけの公債の廃止、そして貧しい者を痛めつける全ての税金に替えて、ブルジョアジーの全収入と相続財産に強度の累進課税を行うこと、5)軍隊の廃止と国民武装、であった。<sup>3)</sup>

イタリア労働者党綱領には「他の総ての党から独立した、階級の党」という文言があって、社会党(PLI)は他の議会極左派(急進派、共和党)と自らを峻別しようとしており、この総選挙にあたっては25選挙区——小選挙区制だから1人1区——に、社会党員もしくは党推薦の候補者を立てた。

1892年11月の下院選挙では、社会党(PLI)は約2万7千票を得て、全508議席中の6議席を占めた。<sup>4)</sup>

1892年11月23日に第18議会第1会期が始り、1カ月ほど後の12月20日、共和党議員コラヤンニ(Napoleone Colajanni)と立憲君主制右派の議員ガヴァッツィ(Ludovico Gavazzi)が、いわゆる「ローマーナ銀行スキャンダル」の暴露を行った。3年前の1889年に2人の上院議員アルヴィージ(Giuseppe Alvisi)とピアジーニ(Gustavo Biagini)が、銀行券発行を許されている6大銀行の調査を行ったが、その報告書の公表を、クリスピ(Francesco Crispi)——ルディニィ(Antonio Strabba, marchese di Rudinì)——ジョリッティ(Giovanni Giolitti)と3代の内閣が抑えていたのである。報告書の内、1)ローマーナ銀行は銀行券を法定限度額以上に発行していること、2)政治家やジャーナリストの振り出した手形を、それが不渡り手形であるにもかかわらず、ローマーナ銀行は支払期日の延長をくり返していること、3)ローマーナ銀行は「特別な配慮」による融資を行っていることが特に指摘された。<sup>5)</sup>

当時の第1次ジョリッティ内閣は1892年5月25日に発足し、「新人内閣」とか「小物内閣」とか評判されていた。政府は、1892年末で期限切れとなる発券銀行6行の発券権を1893年3月末まで延長する法案を提出しており、(その審議の初日にコラヤンニの暴露が行われた)、またこれ以前にジョリッティ内閣がローマーナ銀行頭取タンロンゴ(Bernardo Tanlongo)を上院議員に推薦しており、これらはジョリッティへの疑惑を深めさせる材料になった。ジョリッティ首相は、コラヤンニの議会調査委員会設置動議を否決させて、12月30日(クリスマス・新年の議会休会中)に政府任命の調査委員会を発足させた。

この調査委員会(委員長 Gaspare Finali)は間もなく、ローマーナ銀行の不正、すなわち銀行

券の法定限度の2倍もの超過発行や、帳簿・決算書の改竄を報告した。捨ててはおけず、まず1893年1月19日にタンロンゴともう一人のローマーナ銀行役員が逮捕され、続いてローマーナ銀行から40万里ラもの不正融資を受けていた容疑で、立憲君主制右派の下院議員デゼルビ(Rocco De Zerbi)が起訴されたが、彼は2月22日に心臓麻痺で急死した。(世間は自殺だと噂した。)さらに、ずさんな経営管理をしていた他の発券銀行、ナポリ銀行の頭取が司祭に変装して逃亡し、シチリア銀行の頭取も逮捕された。そして1893年2月1日には、シチリア銀行の前頭取で、正廉な人物と評判の良かったノタルバルトロ(Emanuele Notarbartolo)が、おそらくは口封じのために、パレルモ近くの列車の中で殺し屋によって刺殺される事件がおこった。<sup>6)</sup>

続いて2月半ばに、タンロンゴの息子が、クリスピの示唆により、ジョリッティから父親へあてた手紙を材料に、ジョリッティが昨年秋にローマーナ銀行から選挙資金4万里ラを受けとっていたと暴露した。世論は沸騰した。結局3月21日に、これらの問題の議会調査7人委員会が発足した。

カヴァッロッティ(Felice Cavallotti)を先頭とする急進派、コラヤンニなどの共和党、そして社会党(PLI)の議会極左派3党はこの銀行スキャンダルを厳しく追及した。ただしそれは、ジョリッティ首相をはじめとする国会議員の道義問題《Questione morale》としてであって、イタリアの銀行＝金融制度の不備という問題としてではなかった。

政府は、以前からの計画を引き継いで1893年1月18日に、発券銀行3行(王国ナツィオナーレ銀行、トスカーナ・ナツィオナーレ銀行、トスカーナ信用銀行)の銀行券発行権を統一・吸収して、イタリア銀行(Banca d'Italia)を創設した。続いて3月22日法案提出の銀行法(1893年8月10日法)によって、20年間の期限付きで、発券銀行をイタリア銀行、ナポリ銀行、シチリア銀行の3行だけにし、ローマーナ銀行はイタリア銀行に吸収させた。(この措置もまた首相の疑惑隠しと疑われた。)

銀行スキャンダルの最中、1893年1月20日、シチリア中北部のカルタヴトゥーロ(Caltavuturo)において、農民射殺事件が発生した。このコムーネ(地方自治体)の、婦人・児童をも混えた農民1,000名余が、「労働祭」の行事として、本来農民に分割されるべき土地であったのに行われずに不耕地となっていたコムーネ公有地を開墾し、帰途コムーネの役所に請願のデモを行った。そこで軍隊およびカラビニエーリ(治安警察活動を行う一種の軍隊)と農民との間に押問答がおこり、軍隊が発砲して、農民側に死亡13名(即死8名)、重傷40数名が出た。この事件に対し、国会ではシチリア選出の議員達、共和党のコラヤンニ、社会党(PLI)のデフェリーチェ＝ジュッフリーダが政府の責任を追及した。デフェリーチェは、1893年6月19日の質疑において、国有地やコムーネ公有地を農民の団体に分配せよと主張した。このカルタヴトゥーロ農民射殺事件は、ファッシ・シチリアーニ運動の急激な発展のき

っかけとなったが、また1年後の大弾圧の予告でもあった。<sup>7)</sup>

1893年5月11日、政府はエミール・ロマーニャ州イモラのコムーネ議会に対し、解散を命令した。これは同コムーネ議員であった社会党(PLI)のコスタ(Andrea Costa)が中心となって、イモラ市が5月1日メーデーに参加することを決議し、デモを実行した為に、「公務員(市職員)の政治参加禁止」の法律に違反したということが理由になっていた。しかし同年11月12日のイモラ議会選挙において、社会党は大勝し、民主主義・多数派を形成した。その後コスタ自身は、1895年1月の補充選挙で当選して、下院議員となった。<sup>8)</sup>

1893年9月8～10日、レッジョ・エミールにおいて、イタリア労働者党第2回大会が、参加217団体、代表者300名余を集めて開催された。この大会の重要な決定を3点あげると、まず党名がイタリア労働者社会党(Partito socialista dei lavoratori italiani, PSLI)と改められた。年間党費が引上げられて、党加盟の各団体はその構成員数が100名までは5リラ、さらに100名増すごとに3リラを納めることとし、また非労働者党员(自由業、地主等)は収入の10%、いわゆる労働者ではない被雇用者(impiegati)は収入の1%を党費として納入することになった。さらに議会と選挙について、社会党(PSLI)国会議員は議員団を形成すること、議員団は中央委員会と常に連絡をとり、党の全国・地方大会は議員団の活動を判断する、社会党(PSLI)議員団は内閣を信任する投票をすべきではない、と決議された。なおこの大会から、下院議員エンリコ・フェッリ(Enrico Ferri, 元急進派、ゴンツァーガ選出)が社会党(PSLI)に加入した。<sup>9)</sup>

1893年8月17日、南フランスのエグ・モルトにおいて、イタリア人出稼労働者達がフランス人暴徒多数によって襲撃され、30名が殺害され、100名余が負傷するという事件が発生した。このイタリア人労働者達はフランス人から「スト破り」とみなされて襲われたのであったが、この事件がイタリアに報道されると反仏感情が激化して、ローマやナポリその他の都市で反仏デモと騒乱が生じた。ジョリッティ首相は、1888年の伊仏関税戦争や北アフリカ植民地をめぐる紛争によって溝の深まっていた伊仏関係を改善しようと考えていたが、その外交構想はこの事件によって崩されてしまった。<sup>10)</sup>

内政面では、ファッシ・シチリアーニに関して保守派の圧力が政府にかかってきた。ファッシ・シチリアーニというのは相互扶助協会・労働組合・農民組合・文化サークル・政治団体といった諸々の性格をもった、その多くはfascio dei lavoratoriと名のる団体の総称である。その規模は、1891年にはまだ少数であったが、1893年秋にはシチリア全体で団体数200弱、加入者総数20万人余に及んだ。これらはファッシ中央委員会という協議機関を結成し、社会党(PSLI)に団体加盟していた。ファッシ・シチリアーニの急成長と労働組合・農民組合的攻勢に脅威を感じたシチリアの支配層は、中央政府にファッシの解散・弾圧を要請した。ジョリッティ政府は11月に軍隊を派遣して、おりから激発しはじめていたファッシの反税デ

モ・騒乱を弾圧したが、戒厳令を布告するまでには至らなかった。

一方、銀行スキャンダルの件ではジョリッティ自身が疑惑の対象となり、1893年11月23日の議会調査7人委員会の報告がジョリッティへの疑惑を否定しなかったにおよんで、ついに翌1893年11月24日、ジョリッティ首相は国王に辞表を提出した。

ジョリッティ内閣の崩壊後間もなく、1893年11月29日、ドイツ系の銀行 *Società generale di credito mobiliare italiano* がモラトリアム（支払い猶予）を請求、続いて翌1894年1月18日にやはりドイツ系の銀行 *Banca generale* がモラトリアムを請求し、さらに連鎖的な金融機関の窓口閉鎖が続出して、銀行恐慌となった。<sup>11)</sup>

## 注

- 2) *Lotta di classe*, Anno I.-Numero 7. 1892年9月10-11日号、記事見出しは、*La nostra strada*. なおこの *Lotta di classe*（階級闘争）紙はミラノで毎週土曜日発行される週刊新聞で、創刊は1892年7月30-31日、定価は1部5チェンテージミであった。
- 3) *Lotta di classe*, Anno I.-N. 12. 1892年10月15-16日号。
- 4) 当選議員名は以下の通り。Nicola Badaloni, 1854年生れ、ヴェネト州 Badia Polesine 区。Agostino Berenini, 1858年生れ、エミーリャ・R州 Borgo San Donnino 区。Pietro Casilli, 1848年生れ、ナポリ II 区。Giuseppe De Felice Giuffrida, 1859年生れ、シチリア州 Catania II 区。Camillo Prampolini, 1859年生れ、エミーリャ・R州 Guastalla 区。なお Giacomo Maffei, Montecchio nell' Emilia 区は、1895年の社会党 Parma 大会後に離党した。Vera Modigliani, AA. VV., *Attività parlamentare dei socialisti italiani*, vol. I, ESMOI, Roma, 1967, pp. 167, 643.
- 5) Salvatore Massimo Ganci, *La crisi bancaria e gli scandali*, in AA. VV., *Storia della società italiana*, vol. 19, Teti, Milano, 1980, pp. 184~195. 1883年4月12日にイタリアは、外国からの多額の借款によって金兌換制に復帰していた。（1881年4月7日法による非兌換券強制流通 *Corso forzoso* の廃止）しかし経済活動の必要に比べて法律の許した銀行券発券額（法定金準備額の3倍まで）は過少であり、また金準備の不足により金・銀行券兌換には非公式のプレミアムがついていた。このため、発券6行、*Banca nazionale nel regno*, *Banca nazionale toscana*, *Banca toscana di credito*, *Banco di Napoli*, *Banco di Sicilia*, および *Banca Romana* による銀行券の違法な超過発行が常態となっていた。
- 6) *Ibidem*, pp. 187~188. この殺し屋を送った黒幕は、後に、クリスピ系下院議員 Raffaele Palizzolo といわれたが、彼は1904年に証拠不十分で無罪となった。
- 7) コラヤンニの議会演説は、*Lotta di classe*, II-5, 1893年2月4-5日号掲載。デフェリーチェの演説は、*Attività parlamentare dei socialisti italiani*（以下同書を A. p. s. i. と略記）, vol. I, op. cit., pp. 200~202.
- 8) A. p. s. i., vol. I, op. cit., p. 203. および, Learo Andalò, Andrea Costa amministratore comunale di Imola, in Aldo Berselli(a. c. d.), *Andrea Costa nella storia del socialismo italiano*, Mulino, Bologna, 1982, pp. 289~292. コスタは第15・16・17議会の下院議員に当選していたが、1892年の第18議会選挙では落選していた。
- 9) レッジョ・エミーリャ大会の記録は、*Lotta di classe*, II-37, 1893年9月16-17日号、および, Carlo Cartiglia, *Il partito socialista italiano 1892-1962*, Loescher, Torino, 1978, pp. 58-59.
- 10) Marco Segrestani, *Italia di fine secolo — La lotta politico - parlamentare dal 1892*

al 1900 —, Forni, 1976, p. 103.

- 11) Antonio Confalonieri, *Banca e industria in Italia(1894 - 1906)*, vol. I, Mulino, Bologna, 1979, pp. 178. 181.

### III クリスピ内閣の時期

1893年12月15日、ジョリッティと同じ立憲君主制左派の政治家でありながらジョリッティ内閣を潰した、シチリアのパレルモ選出のクリスピが首相宣誓を行った。クリスピは、着任後早々に、暴発するファッシ・シチリアーニ運動の弾圧を開始した。12月24日にはシチリア派遣の5万人の軍隊の総司令官にモッラ将軍(Roberto Morra, di Lavriano)を任命し、翌1894年1月3日、全島に戒厳令を布いて、ファッシ指導者他2,000名の島民を逮捕した。

ファッシ・シチリアーニに結集した大衆の自然発生的暴動とこれに対する政府の武力弾圧に対して、社会党(PSLI)は無力であった。武力弾力がほとんど必至とみられた12月の末、社会党機関紙『ロッタ・ディ・クラッセ』に、「革命」と題する記事がのった。この記事はシチリアの事態に対して、かなり感傷的に述べている。「それは、自然発生的であり、当然であり、正当である、—— 飢餓よりも銃弾による死を望む人民の革命は。」「飢餓の反乱は党の反乱ではない。」「政府は今、虐殺の準備にかかった。」「政府はシチリア革命を押し潰そうとしている、それが彼らの計画であり、それが彼らの利益である。」「そして、プロレタリアートの意識が一個の軍団としての規律を持つ時、プロレタリアートが力によってブルジョアジーの力に対抗できるようになった時、—— その時こそはや死者葬送の歌ではなく、勝利の歌が、真の革命の凱旋を見ることが決定した彼らの隊列とともに歌われるであろう。」<sup>12)</sup>

シチリアの大弾圧の直後、1894年1月6～7日、トスカナ州ルニジャーナ地方で、大理石採掘労働者によるファッシ・シチリアーニとの連帯を示すデモが行われた。彼らにはアナーキストの影響力が強かったから、政府は軍隊を増援した。1月13日には同地方のカッラーラで大理石採掘労働者のストライキがおこり、続いて税務所等の襲撃がおこり、マッサではバリケードが作られて官憲との衝突がおこり、その夜アヴァンツァでは労働者とカラビニエーリの双方が発砲して死者を出した。14日には戒厳令が布告され、この後1月17日まで大理石採掘労働者の激しい抵抗が続いた。結局、アナーキストのモリナリ(Luigi Molinari)他680名の労働者が逮捕・起訴され、死者は12名を記録した。シチリアの弾圧に抗議する激しい騒乱事件は、リヴォルノやプーリャ州ルーヴォその他の各地に発生した。<sup>13)</sup>

国会は2カ月の休暇が終り、1894年2月20日に再開された。社会党(PSLI)は、シチリアとルニジャーナの戒厳令と軍事法廷を攻撃し、クリスピ政府は憲法違反の「法律の外に出た政府」であると非難した。<sup>14)</sup>

しかし下院は、3月3日、「戒厳令は布告される必要があった」と弾圧を承認し(賛成342、

反対<極左派>45, 棄権<Leopoldo Franchetti 他>22), 続く3月8日には、ファッシ指導者の一人である社会党下院議員デフェリーチェ=ジュッフリーダに対する内乱使喚=陰謀罪による軍事法廷の起訴を承認した。<sup>15)</sup> 5月30日, シチリアの軍事法廷は、ファッシ指導者達, デフェリーチェに禁固18年, ヴェッロ(Bernardino Verro)に16年, ボスコ(Garibaldi Bosco)とバルバート(Nicola Barbato)に12年の刑, その他の者にも多大な刑を宣告した。

当時, 国家財政は大幅な歳入欠陥が予測される危機的状況にあった。財政大臣ソンニーノ(Sidney Sonnino)は, 不動産税, 収入税, 穀物輸入関税(小麦100kg当り5リラから7リラへ), 小麦粉地方税, 塩専売税, 蒸溜酒税などを一括して引上げる法案を5月21日に提出した。これに対して社会党(PSLI)は, シチリアの反税暴動で逮捕された民衆の裁判中であるからして, 大衆課税に反対し, 収入や相続財産についての課税の累進制を強めることを提案し, まだ, 北アフリカでは植民地獲得戦争が続けられていたから, 軍事費の削減を求めた。この法案に対してはザナルデッリ(Giuseppe Zanardelli)とジョリッティのグループも増税の方法と公債発行を減額しないことに反対し, さらに北部イタリアの農業資本家達の穀物輸入関税をもっと上げよという要求も出て, 法案審議は引延ばされ, ソンニーノは6月5日の内閣改造の際に辞任し, 結局, 6月29日に法案は可決された。<sup>16)</sup>

1894年3月8日, ローマの下院議場前で爆弾が破裂して8名が負傷する事件がおり, 続けて数件の爆弾事件が発生した。6月16日, アナーキストのレーガ(Paolo Lega)がローマにおいて馬車に乗っていたクリスピ首相を狙撃したが, 首相は無事だった。しかしフランスでは6月24日にカルノー(Sadi Carnot)首相がイタリア人のアナーキスト, カセリオ(Sante Caserio)によって暗殺された。さらに7月1日, リヴォルノの新聞社主バンディ(Giuseppe Bandi)が殺害されたが, この犯人のルッケージ(Oreste Lucchesi)は, 無政府党の謀議による犯行と偽の自白を行った。<sup>17)</sup>

すでにほとんど無差別のアナーキスト逮捕が始っていた。さらにクリスピは1894年7月1日, ①爆発物取締りの強化, ②出版の自由の制限, ③流刑(domicilio coatto, 指定地強制居住)と集会・結社の自由の制限, の3つの弾圧立法を下院に上提した。

②の出版取締り法の内容は, 第1条に, 刑法246・247条違反が出版物もしくは形象によってなされた場合には, 刑法の定める処罰を $1\frac{1}{2}$ 倍加する。この刑法246・247条は対象として, 1)法律違反行為の教唆, 2)犯罪の弁明, 3)法律への不服従をかきたてること, 4)<とりわけ問題となった条項として>諸社会階級間の敵意をかきたてる行為, をあげていた。この法案に対して社会党(PSLI)のフェッリは7月7日, これは社会党をねらったものだが, 社会党はアナーキストとは異なり, 諸階級間の敵意をあおりたててはいない, と下院において反論した。

③の流刑(domicilio coatto)と集会結社の自由制限というのは1889年公安法の改定法案で,

1895年12月31日までの時限立法であり、その内容は概略以下のようなものであった。第1条、公の秩序・安全に対する侵犯や爆発物取締法違反によって有罪となった者は、流刑に処せられることがある。第2条、流刑の指定は県委員会が行う。第3条、流刑の期間は3年以下とする。第4条、県委員会による流刑中の者の予防逮捕。第5条、社会秩序を暴力によって(*per vie di fatto*)転覆する目的をもった団体・集会の禁止、違反者は6カ月以下の処罰。また第2条の県委員会は、県裁判所長官、国王の派遣官、政府任命の県副知事の1名の計3名によって構成される全く非民主的な機関であった。

以上の3法は7月11日までに下院を通過し、上院を経て、1894年7月19日法(法律316号)となった。<sup>18)</sup>

クリスピ首相は7月11日に選挙法の改定法案を下院において可決させた。これは下院および地方議会の選挙の選挙人名簿の改訂(見直し)を行うもので、実際は貧乏人と文盲を有権者から排除するものであった。これによって有権者総数は1892年総選挙時の2,934,445から1895年総選挙時の2,120,185へと約81万人も減少した。主要都市を例にとると、1892年→1895年の変化で、ミラノ10万6千→10万、トリノ15万2千→7万3千、フィレンツェ7万3千→6万5千、ナポリ8万3千→4万7千、パレルモ5万4千→2万8千、といった激減を示し、当時「選挙人の虐殺(*decimazione*)」といわれた。<sup>19)</sup>

クリスピ首相は7月11日に弾圧立法と選挙法改定の下院通過を見るや、議会は無用とばかりに第18議会第1会期を終了させてしまった。

うるさい議会の休会中にクリスピ首相は、はっきりと社会党(PSLI)を目標とした弾圧を開始した。社会党は9月7～9日にイモラで第3回党大会を開催する予定だったが、クリスピは、8月29日付ボローニャ県知事命令により、前の1894年7月19日法および1894年8月23日の刑法434条による勅令に基き、社会党大会の開催を禁止した<sup>20)</sup>。続いて9月14日、クレモナ県の農民抵抗同盟、レッジョ・エミーリアの社会主義同盟、ウディーネの社会研究サークルなどいくつかの社会党加盟団体を解散させた。<sup>21)</sup>

そしてついに1894年10月22日、ミラノ県知事命令(10月16日付)により、ミラノに本部を置く社会党(PSLI)やミラノのコンソラート・オペライオ(労働組合の連合体)以下、計55団体の社会党系労働団体が解散させられた。<sup>22)</sup>

さらに全国为社会党組織が弾圧され、結局、全国348団体が解散させられ、社会党員1,502名が起訴され、後に576名が無罪、926名が有罪となった。

議会極左派3党はカヴァッロッチェを先頭に、10月17日にミラノで自由防衛同盟を結成し、クリスピの弾圧政策に抵抗した。

この事件を知ってフリードリッヒ・エンゲルスは、ロンドンから10月27日付の手紙でイタリア社会党を激励した。「要するに今やイタリアは、ドイツが例外法の12年間に受けた同じ試



鍊を受けているのである。ドイツはビスマルクに勝った。社会主義のイタリアはクリスピに打克つであろう。」<sup>23)</sup>

1894年12月3日、下院第2会期が始った。12月11日、ジョリッティは銀行スキャンダルにおける自らの潔白を証明し、反対にクリスピの道義責任を示すために、タンロンゴやクリスピの妻リーナの手紙を含む書類封筒を下院議長に提出しようとした。しかし議長ビアンケーリ(Giuseppe Biancheri)と与党は、この証拠受取りを拒絶(否決)した。この問題をめぐって議事は混乱を極めた。クリスピ首相は12月16日にクリスマス正月休会の勅令を出させ、翌1895年1月13日、勅令により下院を解散した。総選挙は5月26日と6月2日に行われることになった。<sup>24)</sup>

一方、半ば非合法化された社会党(PSLI)は、1895年1月13日、パルマに64名の代表を集めて第3回党大会を開催した。この大会では、労働者社会党(PSLI)本部および支部団体解散命令に対応して、党への加盟方式と党名を、最低年党費1.2リラを納入する個人の加盟を基礎としたイタリア社会党(Partito socialista italiano)と変更した。また全国評議会と中央執行事務局を設け、国政および地方自治体行政のための最小限綱領の作成を決め、さらに党内改良派の決議案、すなわち、社会党は選挙に独自候補を立てるが、「しかし決選投票の際には、自由という意図についてまじめに信頼できる候補者を支持する自由を残す」ことが、賛成34、反対20、棄権2、欠席8で採択された。要するにミラノのトゥラーティを中心とする改良派が選挙非妥協派を押しきって、議会極左派3党の選挙協力を決選投票段階で可能にしたのである。<sup>25)</sup>

1895年3月24日、ボローニャでの社会党全国評議会は、国政最小限綱領と地方自治体行政最小限綱領を採択した。<sup>26)</sup>

5月26日と6月2日に総選挙が行われた。社会党は152の選挙区に77人の独自候補を立てた。そのうちの32の選挙区にはファッシ・シチリアーニの指導者で服役中のバルバートを、同様に11の選挙区にデフェリーチェ＝ジュッフリーダを「抗議候補者」として立てた。社会党の得票総数は82,523票(北部57,834、中部14,335、南部2,731、島部7,623)で、1892年選挙よりも5万票以上増加させた。議席分野はおおよそ、立憲君主制与党334、立憲君主制反クリスピ派104、急進派と共和党53、社会党15(第1会期末時10、その後プラムポリーニ、トゥラーティなど補選で増加)、その他2、となった。ことにエミーリャ・ロマーニャ州においては、全38議席中の15議席を極左派が占め、その内8議席を社会党が獲得した。<sup>27)</sup>

第19議会は1895年6月10日に開会された。昨年暮よりこれまでの約7カ月間、クリスピ首相は予算などの処理をすべて勅令(暫定法)によって行うという議会無視の態度をとった。下院は8月9日と夏期休会になり、10月に審議を再開した。下院は12月13日に銀行スキャンダル問題の審議打ち切りを決議して、クリスピ首相は自分への追及を逃れた。

1895年12月7日、北アフリカのアムバ・アラジ要塞のイタリア軍守備隊2,400人はエチオピア軍3万の攻撃に敗れたが、その数日前に外務大臣がエリトレーア植民地情勢について議会で保証したばかりだったから、この敗北は問題になった。1896年2月、政府はアフリカ作戦のために、前年12月17日下院上提の軍事支出2,000万里ラを含む総額6,400万里ラの支出を計画したが、これには均衡財政確立のために必死になっている国庫大臣ソンニーノが反対し、さらに2月11日にはアフリカ植民地獲得政策に批判的な公共事業大臣サラッコ (Giuseppe Saracco) が辞任して、クリスピ首相は苦境に陥った。<sup>28)</sup>

1896年2月29日、3月1日のアドゥアの戦いにおいて、ネグス・メネリク揮下のエチオピア軍9万人はイタリア軍17,000人(内イタリア人14,500)を殲滅した。イタリア人戦死者将校289名、兵士4,600名、イタリア軍エリトレーア人兵士戦死者1,000名、エチオピア軍戦死者9,000名であった。<sup>29)</sup>

アドゥアの敗戦のニュースが伝わると、3月3日、ミラノやローマなどの都市では、「アフリカから帰れ! (Via dall' Africa!)」の声と、クリスピの退陣を要求するデモがまきおこった。1896年3月5日、ついにクリスピ内閣は総辞職した。

#### 注

- 12) Lotta di classe, II-52, 1893年12月30-31日号, p. 2.
- 13) Renzo Del Carria, Proletari senza rivoluzione, vol. 1, Oriente, Milano, 1966, pp. 247~249.
- 14) Lotta di classe, III-9, 1894年3月3-4日号。
- 15) Raffaele Colapietra (a. c. d.), Storia del parlamento italiano, vol. 9, Flaccovio, Palermo, 1976, pp. 301~302.
- 16) Segrestani, op. cit., pp. 140~145. 149. および Storia del parlamento italiano, vol. 9, op. cit., pp. 319~323.
- 17) Nunzio Dell' Erba, Giornali e gruppi anarchici in Italia 1892 - 1900, Angeli, Milano, 1983, pp. 49~63.
- 18) A. p. s. i., vol. I, op. cit., pp. 238~243.
- 19) Francesco Brancato, Storia del parlamento italiano, vol. 10, op. cit., pp. 44~51.
- 20) Lotta di classe, III-36, 1894年9月8-9日号。
- 21) Lotta di classe, III-38, 1894年9月22-23日号。
- 22) Lotta di classe, III-43, 1894年10月27-28日号。
- 23) Lotta di classe, III-44, 1894年11月3-4日号。マルクス・エンゲルス全集, 第22巻, 大月書店, 476頁。エンゲルスは1894年1月26日執筆の「将来のイタリア革命と社会党」をトゥラーティに送り, これは1894年2月1日の『クリティカ・ソチァーレ』に掲載された。ME全集, 同上 435~438頁。なおエンゲルスの逝去は1895年8月5日である。
- 24) Segrestani, op. cit., pp. 185~186. Colapietra, Storia del parlamento -----, vol. 9, op. cit., pp. 327~329, 332~350.
- 25) Lotta di classe, IV-3, 1895年1月19-20日号。
- 26) 1895年の国政最小限綱領。〈政治改革〉1. 普通選挙。2. 出版・集会・結社の自由を制限

する法律の廃止。3. 常備軍に代る国民武装。4. 国民投票(Referendum)。5. 男女両性の政治的・法律的平等。6. 地方自治と選挙された者による行政。＜経済・社会政策 Igiene・教育の改革＞1. 小作契約の改善。2. 軍隊・警察をストライキ労働者の代りとするものの禁止。3. 鉄道、鉱山、海運等の国有化。4. 耕作されていない土地の没収と勤労者団体への耕作信託。5. 公共事業を労働者協同組合に認可すること。6. (労使関係) 調停法の改定。7. 税制改革(収入・相続財産への単一累進課税、課税最低限度、消費税といくつかの間接税の廃止。8. 国債利率の引下げ。9. 宗教支出(予算)の廃止。10. 労働者によって運営される国営の老齢・廃疾年金制度。11. 最長10時間労働制、最低賃金制度、1週36時間労働と休日。12. 婦人・児童労働の制限。13. 公共の必要以外の夜間労働の廃止。14. 労働者階級より選出された工場監督官。15. 5年制義務教育、職業専門教育。

地方自治体行政最小限綱領 1. 公共サービス(ガス、水道、交通、電気)の自治体へ移管。2. 3. 税制改革。4. 奢侈支出の廃止。5. 公共事業の労働者協同組合への認可。6. 10時間労働制。7. 公的福祉事業 Opere pie 管理への労働者階級の参加。8. 公的扶助の改革。9. 自治体労働者労働組合の設立。10. 貧困家庭の小学生の衣食を自治体が補給すること。11. 貧困学生への奨学制度。Lotta di classe, IV-13, 1895年3月30-31日号。

27) Brancato, Storia……, vol. 10, op. cit., pp. 30, 55～57. Segrestani, op. cit. pp. 216～217.

28) Segrestani, Ibidem, pp. 235～240.

29) S. M. Ganci, Il decennio crispino, in Storia della società italiana, vol. 19, op. cit., pp. 178～185.

#### IV ルディニイ内閣の時期

1896年3月10日、後継首班として立憲君主制右派のルディニイが、彼としては通算第4次の内閣を組織した。ルディニイ首相は、3月14日にシチリアとルニジャーナ事件の服役者多数に恩赦を与え(5月11日施行)、3月17日にはエリトレーアでの拡張政策はとらないと声明した。アドゥアの敗北による1,500人のイタリア人捕虜のうちの多数が手足を切断されるアフリカ式の懲罰を受けていたことから、法王レオーネ13世が親書をネグス・メネリクに送って、捕虜の解放が実現し、ついで11月26日に和平協定が調印され、アビシニア帝国の独立承認とエリトレーア植民地の境界線確定が行われた。<sup>30)</sup>

1896年7月11～13日、フィレンツェにて社会党第4回大会が開催された。この時社会党は442支部、党員2万人を擁していた。この大会でも改良派と選挙非妥協派の論戦があったが、結局、決選投票では最小限綱領を受容れる候補者に投票するという決議を出して終わった。また、この大会では社会党員、ことに議員の決闘を厳禁する決議が採択された。<sup>31)</sup>

1897年1月1日号の『ヌォーヴァ・アントロジア』誌は、ソンニーノ(匿名「一代議士」)の「憲法に帰ろう」を掲載した。これは、内閣は議会に対してではなく国王に対して責任を負う、議会は教権主義と社会主義によって欺かれ易い、という反教権主義(反カトリックではない)・反社会主義の色彩を強く帯びた立憲君主制自由主義の主張であった。<sup>32)</sup>

1897年1月21日、下院休会の勅令が出て、3月21日、28日に第20議会総選挙が行われるこ

とになった。

1897年の総選挙は、第1回投票総数124万票（投票率58.5%）で、社会党は117,022票、15議席（後に16議席）を得た。議席分野は、立憲君主制与党291、立憲君主制反ルディニ派87、カヴァッロッチェ系急進派32、その他の急進派9、共和党24、社会党16、その他49、であった。<sup>33)</sup>

ルディニ内閣も弾圧政策を継続し、1896年12月13日にはジェノヴァのカーメラ・デル・ラヴォーロが、翌1897年1月6日にはローマのカーメラ・デル・ラヴォーロが解散命令を受け、6月にはフィレンツェで開催されようとした共和党第2回大会が開催を禁止され（これはすぐ後で開催された）、7月にはボローニャ県のすべての社会党系労働者農民団体に解散命令が出され、さらには9月から10月にかけてカトリック系団体の教会での政治的社会的集會も禁止された。<sup>34)</sup>

1897年9月18日から20日に、ボローニャにて、301支部、代表310人を集めて、社会党第5回大会が開催された。この大会では、選挙戦術については前回大会の決議が再確認され、また農民問題については、イタリアにおける農業プロレタリアートが、1)農業日雇労働者、2)小作農・ボアーリ（小作契約に近い常雇労働者）、3)農民と分益小作農、の3つのカテゴリーに分れていることから、農業日雇労働者は抵抗同盟に組織し、常雇労働者・小作農には契約改善をすすめ、小土地所有農民については、彼らがプロレタリア化する運命を明らかにするととどめる、という小農に対して無策な決議が採択された。さらにまた、労働者の社会党員が労働組合運動をする時はそれぞれの組合員として参加するという、党と組合を形式的に分離した決議がなされた。<sup>35)</sup>

1898年の春、前年からの緊縮財政による公共事業の縮小等によって失業が増大し、また前年の小麦が平年作の4分の3程度の凶作であったためパン価格が高騰し、このような状況の中で「パンと労働」を叫ぶ民衆の暴動が連続して発生し（記録のある事件だけで120市町村以上）、この波はしだいに南部から北上していった。

政府は1898年1月23日、小麦輸入関税を7.5リラから5リラへ引下げたが、4月19日の米西戦争によってアメリカ小麦の対欧輸出が一時ストップしたため、パン価格引下げの効果はなかった。5月4日、政府は穀物関税を6月末まで、小麦粉地方税を1カ月間、停止とした。<sup>36)</sup>

この最中、1898年3月6日、下院議員で急進派のリーダー、「民主主義の吟遊詩人」、フェリーチェ・カヴァッロッチェがローマで、保守系紙『ガゼッタ・ディ・ヴェネツィア』の編集者で下院議員のマコーラ(Ferruccio Macola)と決闘して死亡した。<sup>37)</sup>

最も激烈な暴動と武力弾圧はミラノでおこった。暴動は5月6日に始まり、5月7日に戒厳令が布告され、軍隊は市中のバリケードを砲撃し、また軍隊の銃撃によって、民衆の死者は少くとも118名に達した。

5月9日の暴動鎮圧直後、政府は、反政府的と見られる人々を多数逮捕して、5月22日以降、軍事裁判にかけた。反政府的ジャーナリズム、急進派系『イル・セーコロ』、共和党派『リタリア・デル・ポーポロ』、社会党機関紙『ロッタ・ディ・クラッセ』『アヴァンティ!』『クリティカ・ソチアーレ』、ナポリのクリスピ系保守紙『イル・マッティーノ』、そしてカトリック非妥協派の『オッセルヴァトーレ・カトリコ』等が発禁となり、編集者が逮捕された。下院議員では、共和党のデアンドレイス(Luigi De Andreis)、社会党のコスタ、ベルテージ、ビッソラーティ、モルガリ、トレヴェス、ノフリ、トゥラーティ、ペシエッティ、ロンダーニの9名が逮捕され、カトリック活動家のロムッシ(Carlo Romussi)、ドン・アルベルタリオ(don Davide Albertario)も逮捕された。全国のカーメラ・デル・ラヴォーロが閉鎖を命じられ、労働団体とカトリック団体の多数が解散させられ、カトリック大会活動が禁止された。1898年の全国暴動の中で起訴され有罪となった者の刑期合計は、軍事法廷で約3,000年、普通の法廷で約2,000年に達した。<sup>38)</sup>

1898年6月1日、ルディニイは第6次内閣を組閣したが、与党からも見離されて、6月18日に辞意を表明し、6月28日に退陣した。

#### 注

- 30) Segrestani, op.cit., pp. 283～284.
- 31) Lotta di classe, V-29, 1896年7月18-19日号。
- 32) Brancato, Storia……, vol. 10, op.cit., pp. 274～275.
- 33) Segrestani, op.cit., p.331.
- 34) Ibidem, pp. 346～347。なお、1897年5月1日付 Lotta di classe(メーデー特別号)には検閲不許可によるいくつかの空白が出ている。
- 35) Lotta di classe, VI-39, 1897年9月25-26日号。
- 36) Umberto Levra, Il colpo di stato della borghesia — La crisi politica di fine secolo in Italia 1896/1900, Feltrinelli, Milano, 1977, pp. 62, 94～95. 穀物関税停止措置は1898年8月15日まで延長された後、再び5リラにもどった。
- 37) Alfredo Canavero, Milano e la crisi di fine secolo(1896 - 1900), Sugarco, Milano, 1976, p. 155.
- 38) Fabio Fabbri, I moti del 1898, Nuova Italia, Firenze, 1975. その他による。

### V ペルー内閣の時期

1898年6月29日、ペルー(Luigi Pelloux)将軍が第1次内閣を組閣した。ペルー将軍は、最初、立憲君主制左派の自由主義的傾向の強い人物と見られていたが、しだいにソンニーノと結びつき、彼の影響を受けるようになった。

7月7日、下院では前に逮捕された極左派下院議員の起訴について審議が行われ、社会党のコスタ、ビッソラーティ、ベルテージのみが不起訴となった。

ペルー首相は、前のルディニイ内閣が総辞職の直前に提出していた、公秩序維持緊急臨時法を部分修正して、7月12日に下院を通過させた。この法律（1898年7月17日法）はおおよそ以下のような内容をもっていた。1)ミラノ等5県の戒厳令の議会における承認。2)1899年6月30日まで、1894年7月19日法（316号）を復活すること。3)同上の期日まで、政府は必要な時に、鉄道員、郵便・電報局員を軍隊に編入する権限をもつこと、また公務員のストライキを処罰すること。4)地方自治体選挙の1年間延期。<sup>39)</sup>

同じく1898年7月17日法（350号）として労働者老齢廃疾国民金庫法が成立した。この法律は、労働者（農業労働者を除く）の老齢廃疾社会保険であり、60歳以上、25年間加入の者に年金を給付する制度であった。ただしこの制度は全く任意加入であったから、1900年末の時点で10,280人しか加入せず、1913年になっても総数16万人にとどまっていた。<sup>40)</sup>

ペルー内閣は、1898年11月21日に伊仏通商条約を締結して対仏経済関係を改善し、同じ11月24日から12月21日までヨーロッパ諸国、ロシア、トルコ等の12カ国をローマに集めて国際反アナーキスト社会防衛会議を開催し、翌1899年1月には昨年の全国暴動の服役者の一部に恩赦を行った。

1899年2月3日、下院はトゥラーティとデアンドレイスの当選を無効とした。そして翌2月4日、昨年の公秩序維持緊急臨時法の期限が切れる前に、今度は期限付きではない公安法と出版法の修正法を提出した。

この公安法・出版法の修正法は、クリスピの1894年7月19日法を厳しくしたもので、その要点は次のようであった。1)政府は必要な時に、鉄道員、郵便・電報局員、加えて、電話、公共照明、水道、街路電車の職員を軍隊に編入することができる。2)公務員のストライキを、指揮者に2年以下、追随者に1年以下の禁固刑をもって処罰する。3)公秩序を乱す集会を禁止し、このような集會中に呼号し、反乱的表現を行う者を3カ月以下の禁固とする。4)国家秩序を暴力によって顛覆することを目的とした団体の解散。5)出版法の規制について、著者のみならず発行者の責任をも問い、違反をくり返す者に対して、段階的に強められる罰金、発行禁止、発売前検閲等の罰則を設ける。<sup>41)</sup>

1899年4月30日、立憲君主制左派の長老ザナルデッリが下院議長を辞任してしまい、同日、議会極左派3党による法案成立阻止のための議事進行妨害が激化した。6月7日、社会党のフェッリは延々4時間を越す長大な演説を行い、これが終わったとたんにソンニーノは、イギリス議会のグラッドストンの先例を真似て、議長は1人の発言時間を制限し、起立・着席による採決ができるという議事進行規則改定案を提案した。しかし極左派は、夕刻6時30分に一日の審議を終了するという規則を利用して、6月9日にはビッソラーティが、6月10日にはモルガリが長い演説によって抵抗した。これに対して立憲君主制派最右翼のカムブライ＝ディニイ(Tommaso Cambray-Digny)が、1人の発言時間を15分に制限するという一層強

硬な議事進行規則改定案を提出した。6月22日、ペルー首相は、下院を6月27日まで休会する勅令を出させた。極左派は第20議会第2会期の終了が目前に迫ったのを見て喜んだ。

ところが6月28日の下院再開の日、首相は、審議中の公安法・出版法の修正法を取り下げ、一方同時に、1899年6月22日勅令（暫定法）の承認（法律化）を議会に求めるという、おそろしくトリッキンな議会戦術をとった。この10カ条の勅令（暫定法）というのは、既に本年2月以来与野党が必死の攻防を続けている公安法・出版法の修正法と内容的にはほぼ同じもので、しかも、もしこの勅令（暫定法）が今会期中に承認されなくても、これは勅令（暫定法）として1899年7月20日から発効するというものであった。<sup>42)</sup>

このようなペルー首相とソンニーノらの議会戦術は、議会の立法権を完全に踏みにじるものであり、ついに立憲君主制左派のザナルデッリ派、ジョリッティ派、独立無党派の議員達も反対派にまわった。

6月30日、下院は混乱を続け、夕刻4時半ごろ、キナーリャ(Luigi Chinaglia)議長が若干の法案の採決にかかろうとすると、社会党のプラムポリーニ、モルガリ、デフェリーチェの3名は突進して、2箇の投票箱をひっくりかえして置き、ベンチをバリケードに使い、他方でビッソラーティ(PSI)はソンニーノとつかみあいになった。この大混乱のうちに、同日午後4時55分、第2会期は終了した。結局、6月22日勅令（暫定法）は法律化されなかった。<sup>43)</sup>

1899年6月以降、いくつかの地方選挙において、議会極左3党は人民ブロックを形成して選挙戦を戦った。ミラノでは、6月11日の部分改選で人民ブロックが勝利した後、12月10日のコムーネ議員全員改選において、人民ブロックは投票総数約3万票の60%を得て、急進派42議席、社会党12議席、共和党10議席を占め、立憲君主制派およびカトリックの16議席に対して圧勝した。6月8日のトリノーの選挙では人民ブロックが形成されなかったにもかかわらず、社会党は投票総数約2万票中の6,730票を得て、40議席中の17議席を占めた。6月25日のアレッサンドリアの選挙でも人民ブロックは勝利し、また同様の勝利がシチリアのパレルモ県やメッシーナ県で生じた。<sup>44)</sup>

1899年11月14日、第20議会、異例の第3会期が始った。1900年2月20日、破毀院(Corte di Cassazione)刑法第1部法廷では、ジョリッティと親しい裁判長カノニコ(Tancredi Canonico)は、アナーキストのガヴァッラッツィ(Antonio Gavallazzi)の審理において、問題の1899年6月22日勅令（暫定法）は無効だと裁決した。

ペルー内閣はやむをえず、この6月22日勅令（暫定法）の承認（法律化）議案を2月22日に再度上提した。またしても議会極左派3党はありとあらゆる動議を提出し、議事進行を遅延させる戦術で対抗した。これに対してカムブライニ＝ディニが、法案が本会議に上提されて2日審議されれば、その後は討論を打ち切り、投票ではなく起立・着席で採決できるという議事進行規則修正案を出した。下院の与野党対決は頂点に達した。

3月24日の審議は、与党の「国王万歳」と野党の「憲法万歳」の叫喚怒号のうちに終わった。4月3日、過去1889年のクリスピ内閣の法務大臣として刑法改正を推進し、また1898年の第5次ルディニイ内閣の法務大臣として大弾圧の責任者の一人でもあったザナルデッリが、3月29日の審議抜き採決は法律に違反しており、自分は度々の法律侵犯を欲しないと演説した後に退場し、160人の議員が議場を放棄し、残った政府与党議員のみが議事進行規則修正案を可決した。同日、下院は5月15日に再開するまで冷却期間をおくことにきめた。

5月15日の夕刻、議長は4月3日の議事録を採決した。極左派3党は「ガリバルディ賛歌」や「労働賛歌」を歌いながら退場した。翌5月16日、下院は休会となり、17日に下院解散、18日には来る6月3日、10日に総選挙を行うとの勅令が出された。同じ5月18日、議会極左派3党は、人民諸党を代表する統一候補を各選挙区に立てることを決議した。

1899年6月3日の総選挙第1回投票では、投票総数約126万票中、与党61万票、立憲君主制反ペルー派30万票、人民諸党34万6千票となり、最終議席数で、与党296、立憲君主制反ペルー派116、急進派34、共和党29、社会党33の計508議席となった。ただし社会党の「アヴァンティ！」紙の分析では、政府与党243、保守系反政府派121、極左派3党138、独立無所属6という、極左派の大躍進と与野党の議席差が小さいことが報道されていた。<sup>45)</sup>

1900年6月16日、第21議会<sup>46)</sup>第1会期が始まり、下院議長選挙が行われた。ペルー内閣の推す議長候補ガッロ(Niccolò Gallo)が当選したが、これは28票の小差だった。政権維持が困難とみたペルー首相は、6月18日に総辞職を表明し、6月24日、サラッコが後継首班として組閣した。

1900年7月29日夜10時半過ぎ、モンツァにおいて国王ウムベルトI世が、馬車で散策中、アナーキストのブレーシ(Gaetano Bresci)が射ったピストルの弾丸3発を受けて絶命するという事件が突発した。<sup>47)</sup>

国会は再び緊張した。しかしもうサラッコ内閣も議会極左派3党も、過去1年間以上続いた議会での激闘を再燃させる気はなかった。極左派は前国王に対して最大限の弔意を表明し、新国王ヴィットリオ・エマヌエーレIII世を迎えた。

## 注

39) A. p.s.i., vol. 1, op.cit., p. 420

40) Arnaldo Cherubini, Storia della previdenza sociale in Italia (1860~1960), Riuniti, Roma, 1977, pp. 122~123.

41) Levra, op.cit., pp. 299~300.

42) Segrestani, op.cit., pp. 437~440, 448.

43) Levra, op.cit., pp. 333~342. この社会党議員4名は政府によって起訴されたが、裁判で決着のつかないまま、第3会期開始とともに下院に復帰した。

44) Canavero, op.cit. pp. 349, 365, 394~395. Guido Barberis, Il primo comune socialista in Italia: Alessandria, in AA. VV. Storia del movimento operaio del socialismo e delle



lotte sociali in Piemonte, vol. 2, De Donato, Bari, 1979, p. 473. Mario Grandinetti, Movimento sindacale e politica socialista a Torino negli ultimi anni dell' Ottocento, Ibidem, vol. 1, p. 365.

45) Segrestani, op.cit., pp. 470～474. 486～490. A.p.s.i., op.cit., pp.609～616.

46) 『淑徳大学研究紀要』第16号（1982年3月刊行）所載の拙稿「研究ノート、20世紀初頭のイタリア労働運動と社会党改良派（1901-1902年）」中、93頁と96頁に＜第21読会＞とあるが、これは誤りで、正しくは＜第21議会＞である。筆者（横山）が、legislatura 議会と lettura 読会を取り違えたのである。ここに訂正し、あわせて読者諸兄ならびに関係各位にお詫び申し上げる次第である。

47) Levra, op.cit., p.400.

## VI 結 語

イタリア社会党は、19世紀末の議会において、歴代政府の弾圧政策に全力を尽して抵抗し、そしてしだいに党勢の発展をみた。これはまさしくイタリア社会党史の輝ける数頁であるのだが、けれども、はるかに懸隔した歴史的視点からは、全く別箇の認識も生ずる。

立憲君主制を奉ずるブルジョア政府は、労働者・農民の大衆運動、アナーキズム、社会主義、カトリック教権主義(clericalismo)を弾圧しようと欲して、憲法によって認められた集会・結社・出版の自由を法律によって制約しようとし、社会党ないし議会極左派諸党は憲法に基づく自由を主張し、アナキストはアナルキア・反議会を考え、カトリック教会はキリスト教と社会主義を混同するなど主張する。

しかし、政府も社会党もアナキストも教会も、彼らがどれほど自他を区分・差別しようと努めても、観念の世界をつきつめた所においては、畢竟、自他を分け、別々なものとすることはできないのではないだろうか。それならばと言って、観念・思想を全く捨てて、純然たる肉体・「物質」の世界において自他を区分・差別することができると言うこともまた、全くの幻想であろう。

議会という所は、観念・思想の表現が相争う場所である。そして、議会に参加するということは、観念の同一世界の中に自他が共に存在することを承認することになる。だからこそ、反議会ではなく、議会という討論の場所に入ることが、人間にとって普遍的重要性を帯びるのである。

根本問題は、観念・思想でもなく、肉体でもなく、それらの中間（つまり表現）でもない所において、追求されなければならないだろう。おそらくそれは、大衆運動や宗教儀式や議会が生じる根本なのであるうけれども、今の筆者には皆目不明で、それと指差すことができない。今後の課題としたい。

## Partito Socialista Italiano e il parlamento (1892-1900)

by Ryusaku YOKOYAMA

### CRONOLOGIA

- 15 maggio 1892. Il primo Gabinetto Giolitti.
- 14 - 15 agosto 1892. A Genova, il congresso costitutivo del Partito dei lavoratori italiani.
- 6-13 novembre 1892. L'elezioni politiche per la XVIII legislatura.
- 20 dicembre 1892. Napoleone Colajanni svela il scandalo della Banca Romana.
- 9 - 10 settembre 1893. A Reggio Emilia, il congresso del Partito socialista dei lavoratori italiani. (2° congresso nazionale del PSI.)
- 15 dicembre 1893. Il Gabinetto Crispi (3°, 4°).
- 4 gennaio 1894. Lo stato d'assedio in Sicilia contro il movimento dei Fasci siciliani.
- 14 gennaio 1894. Lo stato d'assedio in Lunigiana.
- 19 luglio 1894. Le leggi eccezionali (n. 316), sugli esplosivi, sui reati di stampa, e per provvedimenti di pubblica sicurezza (del domicilio coatto).
- 22 ottobre 1894. Crispi ordina lo scioglimento del PSLI.
- 13 gennaio 1895. A Parma, il 3° congresso del Partito socialista italiano.
- 26 maggio-2 giugno 1895. L'elezioni per la XIX legislatura. 10 deputati dei socialisti.
- 1 marzo 1896. La sconfitta ad Adua Etiopia.
- 10 marzo 1896. Il Gabinetto Rudini (3°, 4°, 5°, 6°).
- 11-13 luglio 1896. A Firenze, il 4° congresso del PSI.
- 21-28 marzo 1897. L'elezioni per la XX legislatura. I tre partiti dell'Estrema Sinistra ottengono 81 seggi.
- 18-20 settembre 1897. A Bologna, il 5° congresso del PSI.
- gennaio-maggio 1898. I moti scoppiano in tutto Italia.
- 6 marzo 1898. Felice Cavallotti (il Radicale) muore in duello.
- 7 maggio 1898. Lo stato d'assedio a Milano.
- 29 giugno 1898. Il Gabinetto Pelloux (1°, 2°).

17 luglio 1898. Le leggi eccezionali, (modificazioni alla legge di 19 luglio 1894, n. 316).

4 febbraio 1899. Pelloux presenta il disegno di legge: Modificazioni alla Legge sulla pubblica sicurezza e all'Editto sulla stampa.

30 maggio 1899. L'ostruzionismo parlamentare dell'Estrema Sinistra comincia.

22 giugno 1899. Il decreto reale (il decreto - legge) sulla pubblica sicurezza e sulla stampa.

30 giugno 1899. La Camera dei deputati è tumultuoso.

10 dicembre 1899. I partiti popolari (coalizioni di radicali, socialisti e repubblicani) vincono le elezioni amministrative a Milano.

20 febbraio 1900. La Corte di Cassazione dichiara che il decreto - legge del 22 giugno 1899 è decaduto.

21 marzo 1900. Cambray-Digny (la Destra) propone la modificazione del regolamento della Camera.

3 aprile 1900. Zanardelli (la Sinistra) e circa 160 deputati escono dalla aula.

3-10 giugno 1900. Le elezioni per la XXI legislatura. PSI ottiene 33 seggi.

24 giugno 1900. Il Gabinetto Saracco.

29 luglio 1900. Umberto I viene ucciso a Monza dall'anarchico Gaetano Bresci.

X V III legislatura,	I sessione : 23 novembre 1892 → 23 luglio 1894.
	II sessione : 3 dicembre 1894 → 13 gennaio 1895.
X I X legislatura,	I sessione : 10 giugno 1895 → 2 marzo 1897.
X X legislatura,	I sessione : 5 aprile 1897 → 15 luglio 1898.
	II sessione : 16 novembre 1898 → 30 giugno 1899.
	III sessione : 14 novembre 1899 → 17 maggio 1900.